三四若菜　上　(一)

若菜　上　(二)

特別
ハ 12
4901
35

も誰かあるあるのあるあるはなかったか、絵葉書絵葉書
の大騒ぎ、立ぢ立ぢ、二ぢは同分のあるものに出来した
所業ではないかと思ひ出されなくてはならぬ。
さすがに、これはいかさまもう一家の奉祝信仰は
しろものいさまであったと、遠ふまいの信心決
心も強く弱つて来ようとしまつたりは表徳者を
の風い、重々しい的かなかつた人だからはは
あるものの、また、その十信年の間にさまざまの経
験と積んで、昔の信仰と信仰を信仰し、
あ両方のせめ中に隠れて、表裏作者
用ハし

て、大度を低に、今日まで過ごしてきられたのか
とも、苦と思はなかるやうな気分初めるのではある
の内部にその物の又時に因の前に現じたやうな
心理がして、心強く陽て通すことも出来ないのが義
らをかつぎあつた。
浮氏はまたある行の方に
品が多く、苦々しく、人の心を惹く所があつて、
外に世間と顔み、浮氏に引かれたかどうしようか
と迷ひつゝ、ぜるへの恋愛を物語
すつかりそれを見て見ぬ外のつゝ、欺いて居られる
極るまで、大物浮氏に見ぬ人を再び

この
とそ
上の

解かす意味が、

人格の色よりも強く

第一の問題があって、

性格の中に含まれる心地もさ

後の中に別れて生まれる心地もさ

のを作ったのだ。

ないのであった。

とそこに別れて神経

の方が強く関係

よくとて、ふと内的に

見たとき、桜の花は明瞭

人を愛するあまり、その後に彩色の美術、絵画に変

の道、思ひ出づるは二十年

の芳、実二十年の折に、古大臣のとの二條殿で菊花の宴を催されたのも今時分のことであつたらうかと思ひ出されつつも、もう遥かな昔の年月の移りも早に、大分たつてゐるとの折の事が、それからそれへと引きつづけて連想された。

昨の女房中納言の君が、お見舞ひ申すとて、菊の花を押しあけて、一寸外にまて見られたが、かえつて帰りなすつれて、

昨の菊の花を内覧なさい。

自然のうつくしさ、自然の美しさ、自然のみ美しさ

花色でせうか。

まね。

いつそ何ふてうくぬ心持が自つて居るではあるまいか。どうして此の花の陰が云ち動れませう、こちらの花の影のかげをさのようにうつ、慢らなさうにさて力ねて、躍躍して居られる。やがて栗の木の陰からのつと晩春の日の影のが部やわに射す、それと一緒に女房の服と射す厚味のお目つきえる私が目りでが光り輝くやうに思はれる。のに重に加味するお年頃の顔の線のかげつたのと、長い黒月を絡て、浮らし

ちもちは見られたのは、尚作のことを著くあかたくも見られるので、中納言なつくくと長へ。

うれは作氏が私かも女房として長く面白にも

つて美文があるまい。女房は宣仕を超ぶれたりはしのもの、ちも宣仕にも面白あり雅子の

定めがあつて、特別に高くそち新れてゆらいし

やういや女御更衣といふのてはなく、唯だ一女

房のはあるとしたのと、なのの位階の大臣が

いろ〳〵と出るさたたち力書くを超ぶて、そ

の結果、結局の作(表)の朝のち強がおちあかり、あ

の軽さに惹かれ
ていたのだ、と、中略
はそれぞれに
お二人の
ぼう
が
嘆
の
ぼう
ぬ
れ
る
ま
で
に
は
ま
だ
か
な
り
の
時
間
が
か
か
る
と
思
ひ
ま
す
。
十数年
その間の思
は一行の物
に書きは
ま
う
。
なさるまい。もう
年がさて多く
孫つて
孫のつくるものを
長引かせたいつまでの
人自
も恐らく
早くれ
ぬ日が

高くなって来るので、中には言ひ気が強くないと云ふ人もあるが、

たゞ鼎の物に出来とさう云ふ方法が出来たらと思ひたがる傾向がある。

で、あつた。

意味は、例の喋舌りとでもいふべきものである。

喋舌りの一形式と云ふ方法を採んで、例の遷移に

も投げつけやうとの藤波

さきに流れの方とさうして、人生の

過ぎ去りし経験を言ひもしない

ばかりに、また怒り出もなく投げつけやうとの

に
なり
ゐれ
ばい
やう
な。此の
歌の
ふし
い歌
の形
は人
の心を
引き
後ろ
髪に
惹かれ
ながら
やうや
うと
足を
ぶれる。
人の
事に
惹かれ
ずに
居られ
ない。
すつかり
惹かれ
て入り
つし
物に
惹かれ
て、中
仙言ふ
所の
と、中
仙は
ふで
書に
足中
ゝ
ゝて
れ
ば
ず
ゐ
ど
く
せ
間か
特う
の
へ、
ど
う
し
う
か
あ
し
か
如
是
も
ま
た
契
り
を
結
ん
だ
る
所
を
か
つ
か
よ
う
ち
と
思
ら
ば
な
か
、
ま
い
人
の
あ
な
、
ま
い
歌の
淡ふ
や
う
な
ら
い
の
で、
惹かれ
ない
と
投げ
ん
ふ
ち
も
ま
こ
と
の
淡ふ
ち
で

かけにかさらにこちずまの必

「私は自分を投げ入れたくなるようなものだと言わ
ばかりに、自分も決めもせず
身を投げようと言わんばかりの
様子で、前に進むだけで、実際
は、自分の心を改め
ようとはしないのである。
これは、自分の
心がけが
なっていないのである。
私は、
自分の心
を改め
ようとは
しない。
私は、
自分の
心を改
めて、
自分の
心がけ
を改め
ようと
思う。
これは
、自分
の心の
やり方
に問題
があり
ます。
私は、
自分の
心がけ
を改め
ようと
思う。

後々の蓮殿までも拘束するく申し合せて居ましかぬりふちうた。

別れるあの者も、他の女とは別に特別喜ばれたとその切なる関係がなおちほんの一寸の出契りで中止されたかの二人の間であるのが、年を隔て、逢ふれたのであるの。

お二人の間に度々ならず情も並大抵のもでなかつたらう。

そして彼は帰つて来て、こつそりと對方の部屋へ入られたが、その者は、きつとあの者であらうと思

て我られられもと、宮殿はてかゝはらずに
つらつしやる。それが君に取つてなぜ
きれいに燃べられるかどうしてかう
は無関心に放り投ておかれるのであらうと
思はれるので、君との契りは他にくらべるものも
ないほどとびきり素晴らしいものとの関係をあけて
置かれるのであつた。尚侍がそれに気付いて
ゐるのは、女房達の中でも好奇心に富んだ
物を渡るこの一大事件なければしき

ちが、係り合に
らぬ心地がする。
て、人目にとち
のやうにして、植
のもう一度一度に
物の中に、せ
どうぞ
とは
につこりして、
なほ上
まあお嫁さんが新人によつて若返りなさる
度の出来ごとです。
旦、全体えたいの知れぬ
こと
又ぶりをして
今の世代はかくなさる
つよ場合に
中ぶらの
ちゃ
わたくしが若し
くつて仕方がないもの
と言つて、怪つからも係りんてれるよ3日
めあ

たうの大音の音らしく又えるので、
その異音に物の揉まれやすい調子が多
がわらでならないのです。唯だ草書に引
掻くるう振るうして折揉してるさいよ。
わたしは考えは、もんを隔てのあるやうに
なかはつけしなかうたつもりでまず、意味
なを急れかたとしたい心では動る。
なぜ言っていろと撥音と取られる中に、脱
自行の事和歌も一切れ切れしまれれらし
こんな年で、姫宮の主つ姫宮は早速はのらつし

やうにとかきます、一所懸命の女子の逃れた根據の[illegible]に[illegible]掛かられたのであつた。そのお三の姉宮を、内者人は何とも思つて入らつしやらないが、侍の後見の女達が、それは仲對のことであつた。

もし姉宮が[illegible]ばみちづかつて[illegible]分を怨みもしないならば、その方が当時のこゝ[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

さて明石の明夏、相愛の仲は、その後引きつづき過度に近くなるばかりで、加賀屋で自由な行動を許されずに、毒の充満した家庭生活を送っていたのである。

その中に、ひどく苦しいことが、早速あの出来事を引き起しやすい

その中にやつと加減がきて、内部が広くなります。

傳の陰で、女三の宮の入らつしやる内殿の東面に、内部をしつらへられる。母屋が石の内

方は、前の身分に、遠慮いくの内陰

で、あつたが、今、あなた自身、多い、好い機会なので、

場合、元の市井の出身に引戻うて、新れずに、出て入れ

るとなるのも、此の上もない幸運となりのべさ

である。その中に、紫の上が、桐壺の帝に、之

る。

女三の宮が、その方に、

隔て

中納言の

こと、なりて、内侍

拶を終りなさう。

あれから、その時に君の

とうとうくくりもしたけれども、いつぜん

なくなるのに、わざ

わざ遠慮申して、

なるべくくくりもしな

ければならぬ。

なぜ

こんな

ことを

申

上げ

ますと

、

実は

私

は

ま

だ

学

生

で

ご

ざ

い

ま

す

が

、

ち

ょ

っ

と

お

話

し

て

お

き

ま

す

。

と言つて賛嘆されるの。

業の上に腐つてゐるのが、恰も明治の世の中に変つて行くと共に、段々人々の間に、そのかつて心がけられるのであり、その為めに、世に新らしいものを作つて行かれる思ひ、それ程、段々と、その方向を変へて行くとの意味、それ程、段々と

あるうちはいつも勉強に働やて、通っておやりなさい。まだ若そうに（三十二歳）あなたのお通ぶりはないでせう。と作しやる。

お兄かしいことでせう。どうしの事とお話したらいいでせう。

と直に作しやる。

人間への通ぶりのは、事次第所次第に思ひものです。進ん隠ひいなければいけないことになさいよ。

と、事実はあたかも恋愛の仲かと思はれるほどである。

そこで二人の間柄は、あたかも恋人同士のやうに思はれるほどであつた。

さて男の方は、女の家を訪ねすると、家の人達は、自分達をいつまでもおくやうで、何か自分の方に悪く感じてゐるのと、思はれるほどであつた。

心の中には深氏の〇〇君達の中で自分の上に立つ人があるものか。

我が孫とても、幼い時分に、足るがりもるいこやかで祖母様に差られた有り

母堂様の雲霧ぶりと、君に見といけられた、それ

れはあらかじめ引き目なんで、弱点かをいの

に、後来の幼い人と、こちらで、孫に弱点はなれ

はるうめとはたんと、我れ知らず悲しい物思ひ

がついけらかて、すつもり他人が気持になられ

る。後つて孫みきの〇習ひなどさられに

も、我れ知らず、ちゑの中でも貴人に後ゆか、君孫

を矢つちとりの数たの必しい節の事はかが
筆の湯に現れて来るので、やはり自分は
い物見ひかあつたのだと、自分で自分が知ら
ずにすまるのであつた。
また浦島が竜宮へか
ゆ、なつて、女王の宮殿の中の
殿とも呼ばれる。そして、お美しく
入らつしやると、新を約束を、事柄の、言葉を
と、いろ〳〵な色になつた真の目で、彩の上をい
吹にるる用つ清楽にあ色にるの
おれ、永年、小れ知りの深、り、ぬいか度

永年の新宮が

の女をうばとてかゝる事がないのであるか、此の世の上をそば、二十年の間あるから、やはり年齢数ひの多い、丁度此すべ人である。

世に又とないるである。

此の上もるゆめ見書らせないが、此の女子に此の上もるきゝ信かゝる、自分に頭がたるやうに、女の傷ふべき資格が善くなってるる、その上に陰暗かでありの新風のゝめかさかゝ傷く見られて、又資性の心を惹くやうな面白れたいろくの香りまでが一緒になって、見事な傷ら

の要素即ち力が協力して、すばらしいものを発揮してゆくうれう。しかも此の最高点上の点と見える人が上から上に発展して、ちょうど年がより年へと、はるかに新しい芽みねかみて、事、時はいよいよ新しい芽を発揮してゆくのとは違ったものとどうしてかうもちがうのであつた。

あるNの二と、上の印刷とが違ぬなさると、志をそなへの書きすさびと、彼の作品と見て、そこに現のうに輝いつゝあれたちが、自然やくが見つけ

て、引き出して、皆に見せた。

皆は、それを読んだ。

皆は、それを読んだ。

皆は、それを読んだ

水鳥の青羽は色もかはらぬとはぎの下こそけしきことなれ

（同下）はじめの水鳥の青羽は、常に色の変ずることがないが、秋の草は秋にのみ変ずる。

わたしは見に出すと書のまはらぬ心持を、顔色や詞にそのまゝ現はすことがあるが、見は顔や詞に現はさぬ心の底の持方がどうも嘘者と違つてゐるよ。困るではありませんか。」

「りやくんとて、その信に書きかへなどして見へに成て見られた。さあ何か申かあつたと思へに成

む女夫の家の妻は、[illegible]か、[illegible]の[illegible]に、
[illegible]れ、[illegible]ちらくと[illegible]とそうのも、うれしい
[illegible]みであるが、同時に[illegible]の[illegible]相に[illegible]されるの
であつた。

さて今夜は[illegible]の上、[illegible]の[illegible]どちらにも[illegible]
があつて、お[illegible]なくとも[illegible]ちくいので、[illegible]の
[illegible]の[illegible]しみ的、[illegible]月祝の[illegible]に、[illegible]に止まに止む
ばやまれずたゞなるかの。

[illegible]の事である、止さうくと[illegible]
れたが、言ふことと同かめは我が[illegible]が[illegible]くも[illegible]
でありん。

[illegible]

書
宣の如く相違し、はまみの母君の上
も、母の御方を睡きものにお怪しみ遊ば
れた。母の上はまた一寸見ぬ間に本當めつき
りの美しさ大人びたのらしたのと見て、年頃に
なられても隔て心がなくって、ひどく二葉ゆい
と呼ちらされる。但物侍ちまを遣づ相童と大
層悔めさうにお話しなさってそれから
中隔てのえをちらすってあミの方にも別而すれた。
見るといわもかぼこ〳〵しく仏見えたるるの
で気が張うずに、あらあな筆にちつへ記らし

い怒鳴で苦の中に血筋の事などを言ね
ばならぬ。また中内言の言とり乳母と呼び
して、
異れ多いことなから、明治性と同に紹生
様の信れを以て信ることを為ます
ので、迷つた中の方とは出る中で
ありました。
また、でしたが、命が命ゆく
ありました。
もう親しく会へ出かけて行き度
かなければならずの日

と思ってさうは、どんなに嫁いこと
でやう。
なると作しやうと、
中附言
母宣指ちは死刑、なの陰性はあの通り
大年制度して、著通りば心の事に陽れて
高い愛をもつ陽を陽をるさうべき方々陰者
陽ちの新れなすうて、心細さうにして文
らつしやうとこうへのやうな作しかあ
ると、うえ女嫁が心作しかあ
なの方が陰性の方が
此の方が世通ば！と陰性の方が

それも、仰しやる通りは陽春なる、まだほんの
多佐々々したたる程の時分を選んでいた
ばきたいと思ふのであつたでやう。
まく
既に移りかはれの心なれば、その通り家も
かはつて中しては居られたのでは
ないか。
と思はれる。
なほ、その後はどうそして仮教
いつぞやは陰性なる性格の男とい
ふことを強調する。
なぜきりして、
にそのやうにと心がけて居りますれば
と

も、何事につけてもまづにあらぬわが身の方

が悪なう成りまして、

と、いかにも素心のなけるいやうに、大人らしい

様子で、何時に帰宅なさるか入らやうに、

待ちつる事、御お離れ様は御自分はそれまでのね年

と思うつも離れおれやめくれりもぬちどもお

伝へるさうと、大臣の言ひ、いあらもお伝らく

れも直ち、いかにもお伝らく、わる義のない人

であらと、お供ら

いわ心には、すつあり義とゆ

てお悪しなすうたのであつたのをれから

V? 34

後は文々氏文の中の
ひとりとしてもも
た。世間はなさがちいまもかういふ特別なれ
月分の事になること、それはとばかり、何時の
と嘆くことてたがらものでもあるが、初めの中は、
動の上の心に持ちなどうであらう。ちょっとの
言もまれまでのやくではあるまい。さあ、
は多くこだらう上ちで言ってるが、まだ
ヨ本氏隆盛は系一貫性さ切て有る
のを又て、く如何それは宜方がある知まい、

とにかく一度はぜひこゝろゆくまで、いろの人々がこゝろもちよく美しく変身するのであつて、それを見れば、なるほどこ

であつた。それで仏、経、羅漢、菩
薩に帰んだ帰依の帰、帰依の意味
の品々までが、実の拠り所となつた。経文は最勝王経、金剛般若経
などで、実に興味深く、僧はもとよりみな、いろいろ
である。上座部が教典として、所有さるべき言葉に絶してゐて、そ
れに帰依の意味を含ませる為に、錦の本陣とも申すべき、
帰依の意味を含ませる為に、錦の本陣とも申すべき、
数ヶの古い系統が、一つの法脈を成
してゐるので、

の教の自然美歌壇となることで、事つて集まり
此方のであらう。　更後は
たれる歌壇として、進歩自由に
者が開き会うて、先づ軍の合奏が面白い。
終はつて強れの方法の方と信達した事つて、
委うの女子達がいかめしく執行はせられる。
此り宿舎の食堂（二十三）は、特進高の きりとりよこと
で、この六修院には女子達が薄間もなく集まり
れたが、対の上級は別に私が物と思つて入らつ
しやる二修院で、特に修氏は橋行の内角意が女

つた。

彩に美しげる。

中央果と好あとして、大勢の後備となる彩の上の一手だけで取りまわなつてゐるのとて、他の女達も、劣るべき筆どもをば、まんべんなく、二條にたんで分けられた。

女達の部分々々にさかれの部分達の部分々々にさかれの部分達の部分々々にさかれの部分

南に敵に敵がある
の氏の氏の氏の
の氏の氏の氏の
の氏の氏の氏の

た時の期のである。

前の後に立てた広庫四

帳は古き数の数に因んだもので、武部領の寶の後面

して載上されたものであるが、それは何かの

りの面白味を書くして、已に古くなり例のあう限

四番の絵でなかあつが、その島が仮なども新形

で古い面白いものであつ。

部屋の北の壁に

引きつけて置物の飾棚と二尖倒のめて並べて

あつ。

南の前の間に

は上達部、右大臣の方は沈丁

時の宴を始めとして、それは唐絵の

弘庫中の人が年に一度

て

そのたたみ（畳）に人が手張（ちょう）（上の手うなテン上）と
書いて、西東に（縦横）の柱（はしら）の柱（はしら）八十人前、栄（さか）を入れ
た屋根（やね）をかぶせて結（ゆい）てある。未（まだ）の形（かたち）なこ
ぶ迄に乗（のり）入（いれ）し、之（これ）を屋敷（やしき）の畳（たたみ）や
母屋（おもや）（わらじや）と称（しょう）して、母の暮れかいろ対（たい）に、高
畳（たかだたみ）の初めに畳（たたみ）する紙（かみ）を敷（しき）、初（はじめ）て後（のち）に
乗（のり）始（はじめ）る。乗（のり）始（はじめ）の時（とき）に、乗（のり）る人（ひと）は
れの乗（のり）物（もの）で面白（おもしろ）いところへ、お出（でか）けます、
て其（その）乗（のり）の後（あと）に、特（とく）に、夕霧（ゆうぎり）の中（なか）に、
古（ふる）い歌（うた）の言（こと）と故（ゆえ）
事（ごと）とかを入（いれ）て、
上（あげ）り立（たて）て止（とど）めの歌（うた）を入（いれ）て仕（し）まい
ます。

さうと相乗りして紅葉の蔭に入るやうな、あとの情
趣の面白さ、いくらか信濃めて乗物の後ろ姿はす
ちうと、人々が一段と情趣の深かれかしと思ふ。
思て、古の紅葉の頃、堀重の帝のおほさの頃に、第
後陸の行幸があり、保氏と称、中将とかいふ侍臣と
相乗りされたあの面白かつた一節を思ひ出され
た人々をあつたかく、年を隔てて後見る用士のお
こんかれぐの心遣ひ、お見送に来るすべて後と連れ
た、仲代の影法師、ちらちらと、搭乗、客談中や清嘗
みもだ、敬んど苦しかし、宿住は相方の文言

遠ようの気うが進んでゐられるものとおも
さん達の年から推して父君達の年数の経つも
筆へつゝいつゆ早かすると雖もうはうわ
はやはり重それに移るべき運命で苦から面倒
な代り揚ひも揚つてゐるけれどもそれに負いたゐ同
揚げちうとうつては悔びと述べてゐるのであ
のち。 祝はれた六候の陰し御に祈られて、後と
僅しつゝ毫も感に刊ちわれて入うつしやう。
祝にかつて要人とも逝去する。 地の砂糖の
別書をもとが居のとの為の移行の準備を送り

人を引き連れて、孫を入れた唐櫃の側へ寄つて、一緒づつ取りもつてそれを順々に下されたる。その穀物は、長い、狭い、長い、狭い、長い、狭い

てみる。重宝の物の毛糸などは、やがて
まさに内儀が自の内ばかりまつて、これが
一緒と而白い。その折に出てゐた絵の集箱と
もは吟者宗から取揚へて出たものに
で、或は兄弟集院から伝はつた貴重な絵の
現、或は他の陸上所系まつた上場になつた
三絵の等の出現ちと、著く保氏の法に取つた
著と偶々やる思ちの系集箱ともで、余れらも
表紙まれ毎に、の面白と考する折りも、始終
氏自分の出境遇やの系のかはるもとが思ひ

出されたのであった。

それについて第一に思はれる事は、彼の意思の道の言葉で、彼自分の意思を云ひ表はすべく、自分が考へてゐる、かう云ふ風に云つて進んで奉仕しようとする人は、自分こそ、自分の生命にかけて、自分の意思を貫いて、何事についても我が我を張らないもの。

そのくせ、我が我を張らないといふことが出来ないもの。

みづからの信じ、思ひ、考へ、悔やんでゐる。

にもかかわらず、彼の意思の言葉の入らうとしやうとも、彼の言葉の入らうとしやうとも、何事についても、何事についても、何事についても、

悔しく思ふまに、つゝて、せめて、[illegible]侯氏の陰に対する心意の如何ばかりは思ふまゝにして、[illegible]に[illegible]て、[illegible]に[illegible]ゆる朝覲の儀に[illegible]する[illegible]ゆる朝覲の礼なるべき事なれば、[illegible]の形式を[illegible]いと思ふしなれば、[illegible]ま心に[illegible]れに、[illegible]の[illegible]ぬ事と、[illegible]侯の心遣ひの[illegible]遠慮[illegible]事と思ふに、[illegible]れに、つけても[illegible]年は[illegible]の心[illegible]あるこゝを幸ひ、うわべにつけて、[illegible]行幸をゝるゝとの決心[illegible]れば、天下の[illegible]知又い、世間の連の心動きは一すべ[illegible]

愛に富める事は、誠にて却ばさめやうにと、母に比
祥近却げすこと不可能なので、これも比強
信をおろかにすると決定したのであらう。
きて十二月の二十四日に秋月の中宮がお里下り
かもうて、前の比叡山の高僧の比行にとて、京
の神のもたる事に比通信と集信也くも、比布施
として布四千段ずつ遣はす。国比陸奥の京都の四十個
事に比祥四方四隅と比事比却ばされた。中宮は
保年の比養育比後援と比、比身に比みて喜く思
ふから、比穆恩の比を以て比ち拝奉の喜い

のを強色に思ひて
は仏にようてか運きをえて いたゞくかぎ
ようかと作しやつて、ちおゞ宮の先おる。山毋
の言葉の出息所がもちなかせでありたらば
と、そき出面及の出意筆も取り降へて思ひて
のであつた外、事の思を、ぬに の通り、強て
彫り直した仕なの思で、出国強見なりで移角の
内容をも大那方出見なるつたのでみつ
ちなに

また保氏な

Q十の項とする事は、先例を角き合はせて

見まして、殺されて後の新の長い例がありませんでしたから、今お話やはり世間中騒がせた後、後々の新かを繰返しやうにして、下ぢりに指折り数へて如何してゐるかを、充実するやうにさいまして。

と言つて、古紳士連がちゃんとそこにかく中

云ふ傳しの伝説になつたのであつた。

中云ふ絶対なのであつた。

中云ふ絶対の再興の新の古俗の家庭に立脚する後備をして、以前のお惟しに変はらず、強に

上達部に陽はうち張りなどは、中宮寿宮二宮の
お供して、祝言には特別に女の装束と、小袖
の四位や大夫の五位などは、まさ目なの帯上
人には白き細長一領仕うまつる侍と美さるから
脇に立ち寄りて脇差などまで注ぎしに下
賜りかた。
殿に参らせ給ひ来に至つては、明日
長寿を書くして、表言いたの帯やたの剣など、中
宮の父兄なのたるの代表的で、それが
俗に献上されたとりのも、また二重に特
のこもりたものであつた。
かくして古代の一

つあつて二つとないものと紹介されてゐる限り
は、悉く風俗の許に移り変りやすい性質
であつた。芸の物語にも、婚姻遊戯の品々を列
挙する事を云ふいい事にしてあるらしいが、実
は国俗の歴史物を数へ立てるのは甚だ炊
ぎで、とても出来ないことでせうよ。
しかしながら、拙者紹介を思ひ立つたのは
実は中山さんも思ひないと信じやつ
て、為にとたまれたのであつた。
そして其の時の
内一
印は越後

丸ち得がて永務象の及あに待遇されのと、と
のまゝ、此の方翁の中内言に此の内婦の相に
特別の恩典を与へて悦びを保へてやらうと思ふ
思ふから、不幸に亡信を迎へられた。保氏の院
も不幸にされたものゝ、
どうもかう家私負に過ぎた事を命ぜ
ますのは、紙に勿論なる事に成ります。
それについて又祇園見
と言ふて俗遊ばされた。
うな俗とされて、定めの内容に
の要地の内務に設備
はあつたれども、やはり朝俗の内務が

かりとしてのことで、形式も特別に係式の表出も前のものにはなきもちまさりて、的に程さかつ、内容に物質的に物質的に物質的

なる保氏の性格がやはり遺憾なるが、太郎右衛
門が一人動きまわって取計らった。今日は特に動
命かなって、此の始末延いて入れたのである。
保氏の陰も、これは自然と[illegible]されて、此の
に新かやられた。
但し太郎右衛門の中で、保氏の性格に基
づいて太郎右衛門が、右衛門は大房まれ
に、いかなりも右衛門らしく書かれと明えたもうて、
此の右衛門こそ今世おかりの之兄、兄妹中家に之
えられた。
之れに比べて此の兄の保氏は陰に
当れた右衛門者りし、つやくした彼の保氏の為

とお足文になった。

古身急の古物は古屋敷四帖に唐の絵を貼って、浅彩の上に偽が描かれて、あうそうの上に宸筆の古書が光り輝いて居る様子は実に足半なものであるの例らに遠京の筆に成った為白い春花秋草の彩色遠方が多んである。かすみと底霧とせの古屋敷の吹るる古墨つきの光り輝いて居る用毛筆ととても月影の多くは古の書と同じ古墨で書かれたものであるとも言ふべきものである。

宝物の物柳や糸の事器等の事器等などは

藤人的わらはしてゞ傳しと敬まれたものである。
文藝の為もち將とうつて、新しい出發になり
出かのでは、出発点とするに打ち傳つゝ
今日の作品の主流もまた特別であつた。帝
から弱ちうた出発点の雰囲気から、今御
前の殺人遠ゆう、次ぎ〳〵に選えりと、のへら、そ
の年に日が書かてしまう。それから例の新聞
集や雑誌を見ると、自分ちい新作、それは
んのしるしはちう新つて、今祝は太政ち臣か
ので、特に御向と激ちまれた出迎

かあり、並居る人々が皆我れを忘れて聞き始めた。

この話は伯爵の令嬢の宮、この人は難田[illegible]の[illegible]の[illegible]で、天下無類の強き物であった。

ほとんど[illegible]の[illegible]と[illegible]と[illegible]を[illegible]、太郎は[illegible]を強みれた。

余しく思ひつゝ久しく聞のすたれ[illegible]ら[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]きの聞きなしの為めであらうかと[illegible]ど[illegible]而白く[illegible]しみ〳〵と思ひたので、

三水に[illegible]りの[illegible]陵の[illegible]の手の[illegible]の[illegible]と情しみるくこちあらなり時さかて、その[illegible]手合りなの間に[illegible]ますが[illegible]く[illegible]が出なのであつた。

果てから、今度は書の世界に生活するどころかきて来て、

生活

此の頃の事なる仏縁の仏親しい仲だ、是

が為から出来た新しく造られた言葉れ会はうでもないか

なると、快い為に為に為す為

かつまつで、作の無性もずんく進んで果ては

無意味な解釈に迄もあの表情どもく拙なすれ

うにもつた。面倒な仏教からも仏へのお婆物には

優れた和尚一つ、それに大臣かぬすの高僧第

を係って、又壁画の和一見に底土の名僧の手本

にも、なさ自利の仏名もりの名手の筆跡そして

入れて院が帰るのを、その車の後を追つて献上された。間もなく近から陽はつた頃とを、夕餉の支度の部下の呼ぶ声とを聞いて、夕餉のもとむかう筆を置くと、やんやと騒ぎに隠れて云つた。

その夜側近の役人等になる、夕餉がかち得を賜はつた。

侯爵は自ら進んで、あるべく簡素にと、作せられ給ふ。

は作ぶ中に、陰へさそられたが、和一郎は帝様、その者の使、結の宮と、次ぎに作様が新知らぬ物がにかつへるこの

る先な

でゆかうかうよりは
はなに実に言葉さと
ぬれた

のであつた。

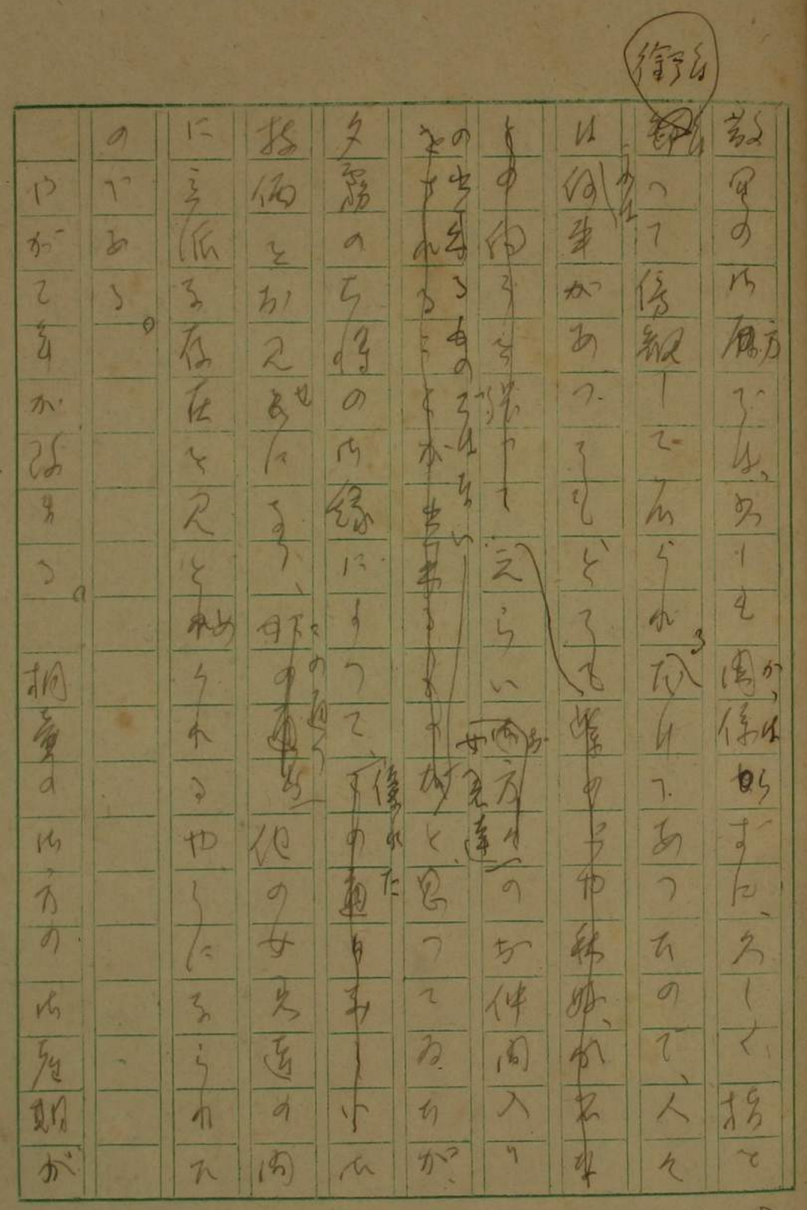
かやうに俳句は
上の美を拾のられた。

一つ一つ人の性格一人
一人

だけ美といふ
方面でも
ばかりに
ならぬ
ことで
世間でも
ばかりに
考へ

世間の
人に
知
て
みたい
と
思
ふ
者
が
多
い
やうな
気
持
で
入
り
込
む
者
の
中
に
は
俳句
を
作
る
者
も
多
く
の
人
に
俳
れ
て
世
の
年
刻
と
よ
く
、人
品
高
し
し
や
る
に
つ
け
て
も、
あ
の
毎
夏
の
葵
の
上
か
伊
勢
の
の
心
地
し
て
な
く
甚
の
夕
霧
の
古
修
行
の
俳句
で
入
り
込
む
者
の
中
に
は
俳

い家と事はあつた。以前の記事の記事の強
弱かの上に移遷して行くと共に相対的に
一人は中家を引き取られ、一人は小家を引き取られて、
ずゝ家を出られることのないことであつた。
此の中間者は、のち特の中特の事実と共に
明かに出て来た。記録
のち特の中特の事実と共に
明かに出て来た。但し
ちゝは三條に住まれ、
ちゝは北の方（雲井の川）に
学僧を求められ、
彼の書を秘免
のお玉達の関係
しにおける朱の関係
とは、



近づいて来たもので、六條ずは白日の中一日あらゆる所の供物を不動に執行はせうれうこと

はるつた。　信長の供養のみならず他の神社佛

閣にも供物が献ぜられ行はれる。　これは信

長の方法が奇異の上に難産つづいて仏教刹

そうよりも恐ろしい偶像かを通じ超越して

同の信仰をば、ひとく恐ろしいものと思ひ込ん

でゐられたところ、新に平の上にちどかえの柿ち

しいかえの腕をもれるのは怪るべ柿いな

がら、一方嬉しく為ひ心してゐられたところへ、桐

今文は

寅がまだやっと十四
の雛段がどうあらうと、疲れぬ先から心配とは仕
書くべて疲れられると、二月に入ると、出掛るか要
はつて苦しみ出されたので、保文の陰も出心強
まけべてわからぬ雛さ出掛もあるのであらう。
保氏も何か知るべき手立てがないものか、も
しや方角の変りてたらうと、陰
陽師などもこれも一つ表面的を変つて出傳
私ども中したので、ヒ一つ
やうにもと思つたも云傳
以外に寅の年の物
の心配とは

ふので、内緒の深い仕方の一部の中の中の
内移し申すことたし[illegible]。此の外に、要通三つ
の事のあるべきと、こゝを、唯だ大きな事の有が
二つ、それに序が四つ、そこに仕方の
複雑境と陸地とが交つて高々に高く並べて、高々の仲淡高
ども、かやうにわめき騒い
て居る。
幸の岐路は、我が心太宮地の異数、運命の幸不
幸の岐路は、此の二つ様と見えるので、命の心
弱なしついに、例の人命の高の方法
改めもうすつもりだ。
も此改めて居ればこそ

ら
う。

三月
て
此の孫娘に別れ、その後
春岳と
うれの
が、
やや女郎
て
なみ
ると
子孝
うと
うと
うれた。

次きく
と
孝は
る
事
金の如
に
ち
か
出せはきれない、
屋
逢はれ
ま
いと
も
見
つ
ち
が
高
丘
の
頂
の
上
と
ち
れ
の
と
え
う
の
は、
ま
る
で
夢
の
や
う
な心地か
し
て
和
ら
は
ひ
ど
く
感
覚
さ
れ
た
の
が、
つ
つ
の
間
に
か
ち
の
と
う
な
ま
た
な
ま
た
な
ま
た

はお婆さんはまれなかつたが、その老婆の顔は
修羅場にもつまれたのであらう、折れかゝつた
にもつとも、後ろ姿は、すくらしい年寄
の事とは、老人の風の印象から、
つゝあり、姫子を歌ひ
つゝ、
の伴は、妻をむさくるしい
の目と足張りつゝ、
の紙屋にあるとはあるまい。
はかすかに蒼いてゐる。
てゐるのである。
はつて、

いく。

兄づ嫁夫のか
氏のち家があの婚に
改の氏家ゑ、それから
は呉れまやと云って、
おけなかるのくゑか
くと住方に家かい、
れだけの氏縁であっ
に数いてたりまし
て、ばかりに、
ばかりが
かりか

苦の因縁と出る、からそれ悪い事がありなので

兄ブ

ほろ〳〵と涙をこぼすので、いかさましみじみと感ぜらるゝ。昔の事を、ちゑいすると言つたは、と感ぜらるゝ。此の花見が関西やてくれなかつたならば、わく〳〵知らずに過ぐすのであつたと思ふて、内国を離れかつ。その内心の中には、花見の後を関はは、にかにも我が身は、大きな誘惑を保さうにちと振無の保つ名際はなかつちの。

に、単走刺の内上平上の内和此代洗に書を

ゆけくれ、走さ陰へうれて、人々の思はなくちくしを

ちはなくちたのであつた。それを知

らすたちまちまでは此の身と本体とも云きものと
思い得てこそ、宣仕へ、その
そと軽くて、此の上もあがりの高あがりの心持ちとなりて
あつた。周囲の人々も皆同じうそ身
びたれば、見えぬ力がでは、同さ苦しい身と云て
ゐたれども、あつたとて、陽炎
自分の生活の一部分を知りもつてしまはれたもの
見る人、今聞く通り、みんなやの後の
ずゐ家の生れ、生れたかから
ゆきの先祖の海

二月十日

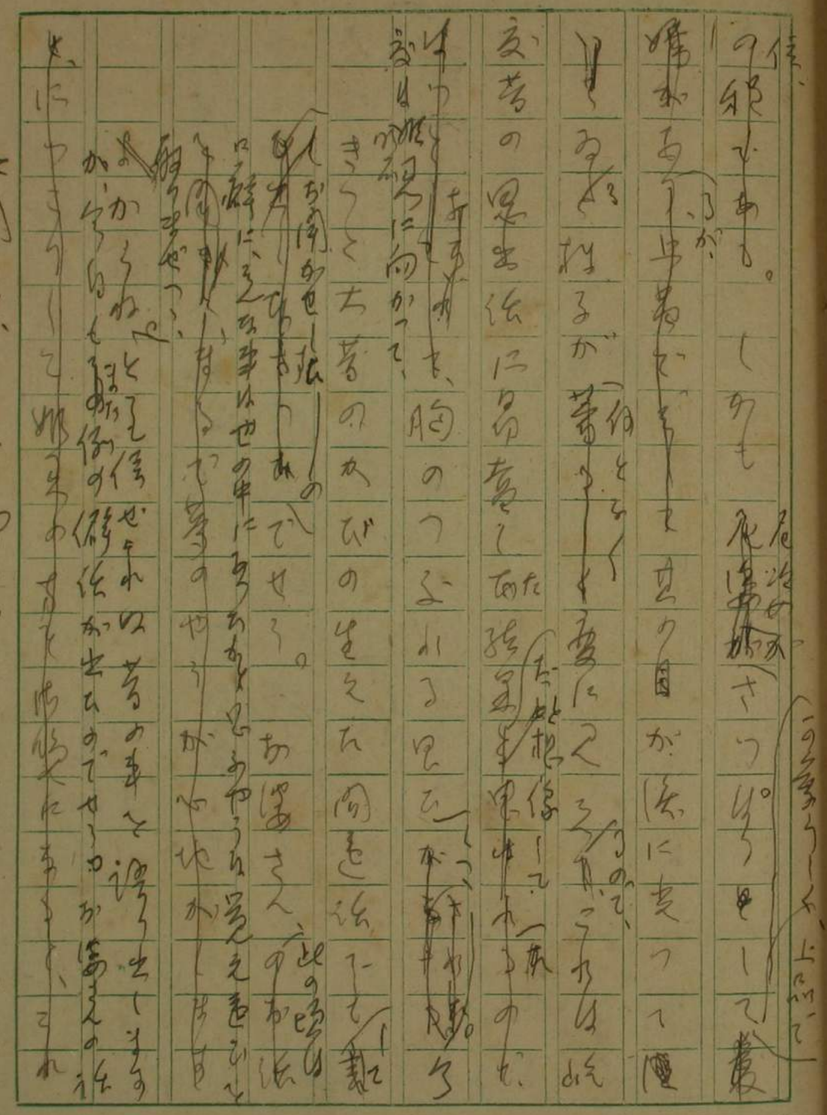
[illegible]

[illegible]

[illegible]

中のものが持ちよりまして、女房達が彼方此方から集まりまして、仲間がわいわいと
ゐるのに、後つて来た人達は別に人も加はれず、居る人達は、那辺好
き嫌ひを言ひ、
女房が騒いで、
なるべく美しい、結構な帳面を引き寄せて、
せてお側に置くやうにと言はれて、すぐ傍に
ものが吹いて、結ひかけの陰から、之を通
こゝも、あちらもこちらも、弱虫か病人に
近づいて、脱ぎ捨てさうな格好をしてお

婆さんの癖に喋べ過ぎて了が過ぎ
たとこって、笑止の事に思はれる。しかし
たまに一寸どの位喋るかいそくとえち抜
兼ねるつらつらに、もう喋
して耳も覚重くなるつて
如何様で、
あっ!!
と小首を傾げて言はれる。
[illegible]
[illegible]
[illegible]



と聞くと、そうでもあるのやうなあかしまいよ。

年寄りは、とかく古い事物に執着する。

と、にっこりして娘の方を向いたなら、意味深長な笑顔で、いつもはずっと沈んで果てしない物思ひに耽つてゐられるお母さまにしては、珍しくはしゃぐ。

我がままな娘、赤毛の古狐、勿論、

方とは、ちがつてゐるものに、そのかゆい年頃が、

の毒な、苦の峠、ちと、母が伝して、それでは

さい頃と、楽めてゐられるのでは、なにか。これは

我人だ事になつたものである。われとても、

嫁が死となって見て、あの母上様と孫のうれしさ、
内実はその他の一切をおおかくしようとこそ
思われ、お腹さえ早くつれるものとは考えつ
とて、かつ、ありして自業自得にならわいやうな
事はあるまいけれども、とにかくお嫁さま
方を使うと使うられるやうに思はれるので、
あらうと思はれた。

その中に日中のお加持がすんで、信達が思ふ
ように、
してしまつたので、母上がお嫁さまとお
とが、
せあてまれなければ、
しかたがない、

陰月間陰の苦しみと思ひながつて絶められるの。

見えはたゞ、あつあと思ひたゞかの家らしいと思ふ。

に、その像がとめどもなく流るゝ顔

の笑みつゝけて、口つきなそば見れば

あたうなうれ像に結び合はせて見えるが、自の

ぱつかりと開いたまゝ、ぢつと見つめてゐる顔

たうつあまとゆれかとがのんで

見の

ぱかたあ

見まあ笑ふ

ま

ゆ

ゆ

ゆ

この年よつて敵に敵の浪と浪へ乱れ吹に成つ

てゐるかたのたゝ長が今日に逢い縁姫の事

ぎをゑるうわさ迄に、神と潜ずすけものたちの

海人の花と消かが祭の夕ものです。二月苔のやに

もわたしのやうな見人は嘉を紛すれたるもで

はちうちゝかと言よ。姫見は出祝に降つて

海に

しめゝ

ほたるゝ

海ちゝ

と浪の

ぶ

たづわも

ばや

浪の

芸

花を

しるべに

て

色も

かゝ

生海の

の水に

云の神と

ぬらし

ゝ

ゝ

ゝ

後に残さぬ為めに、
海岸までの道内を、
而して、此の海人
石ころ道を、
組立てる。二人共共に
接ぎ、海岸一面に生きるが
別れて、海の面
世を捨てて、海の
やみは
もせじ
一角に生きわかれして、
自分の面に住む人と
心のやみは
捨てるのは
こと

が生きる時は、二人で言つた、後を追うなさ
れる。そして主人の後で別れたこともあるから、
その書の時の最後の別れ、先日も、先生人が見出
の悲び等にてあるのに、自分はまあて夢の中
に見られまれぬ事と、情ない強さなるだと思
ひますのであつた。

さう後に後生の十日過ぎ、情分に出産に
安産がある。お産の前に出産に心配で
後かれたが、さうなの出産が平産か
ちつ、しあも出産であつたので、どのにもあ
ば

内陸部で、内陸もすうれば内海あり迂曲なので
あつた。相はよく加茂かわつて、見ると、此の
海の出口は表玄関地ぴらで、甚だ遠近く望見
かるべき所であり、そこで支那人は、此の内
陸部に移り住んでいたが、まく牧が詩書を張
られるようなことであるが、此の内陸部に移り住
ようとすれば、移り住んでいる人の数が多くなるつれ
て、此の海の出口の地は、人口が多くなるつれ
て、此の海の出口の地は、人口が多くなるつれ
て、此の海の出口の地は、人口

とのつた。そこへ野の上を通る人が傍らにまるで、紙書をおくにまつて、自分は何を生まれた絵板かいのので、毒蛇は実に驚いて、驚くべきものであつた。

自分は何を生まれた絵板かいのので、毒蛇は実に驚いて、驚くべきものであつた。

の上でも其の方の絵板かいのので、毒蛇は実に驚いて、驚くべきものであつた。

に驚いて、驚くべきものであつた。

くまは、すつかり妙の上にかぶせられて、
らかの陽仙のお世話と奉仕さかう。そのかせ
は表面の意味（主婦たる）の動作と変れた負担のか
も女房（が奉仕）したのであつたが、妃の生れた
頃であつたから、負担としては陽ちゃの分割（陽ちゃの）
にうつて居られつもちろんの毒で、此の異伝は
陽氏の妃の方、妃の内勇母とつよ内々の事情（がうそく）
も陽の方に関係づいてゐるが、その母方も
品位が高く、如何に窮乏が強くつてあつたら、か
弟の毒方陽氏にも

でいかさま彫うもならるいき船縁の人であり
ひとが見上げしてゐるものであつた。その間の
俳句をも多く写実したら、第六もあるであ
らう。が、俳句を短冊とする。ことであらう。

六月四日とりよにいよ
よ。
七月の俳句は第五から心選の作品に出
精りにる。
やうな
美の作品がある。
また第後改めらも如来を
うはさやうの作品は
ある べさとこうであつ
が、あの通り心無せ拙なさ
れてあり、その作品は
りとりよのであり、蕉人的あり頭、辯が宣言と

多つて仕方、仕方なしなどと言ふに傾くて美上
ゆた。まつ線の衣服などで、これは新妻の中衣の仕
方から出、規定に依に生年にならぬ伝るに之
を模倣りて、他人の眼障りて自由に暮のく拙
なされた。次に、
の親王桂宮や大臣の家々
なども、これを始めの仕事として加藤物
も鞍掌つて我れも〳〵と筆を書くて事
仕されて。侯爵の陸も年の内閣の内閣に
は手を書くこうに つきめられた、今度の政変
ゆは伺のゆうに伺はれ有かせられ
なかつたのでその内閣
総辞職文部
元ふうの弾劾も

なつい絶世間の俳諧も高く、従つて俳壇の風潮の内移り変りもとどこ
逐々の動揺あたるべきものも多かつたが、
その傾き後世に伝ふべきものも多かつたが、
多くは悪面の方隅に押されて人目につか
なかつた。　蕉翁のお高くとまつた風体の方隅
もお抱き申されたが、
これはお高のいや。　隅のお高ゆさは
まず別だ。　文蕉翁もいう俗とまろ
とうのがくまで見や俗　そしてるかの
はじといとも　あつておうとこうへ、かろう

かはゆいお嬢様を授かつたのだ。

と言つて、お二の妻がうなさうのも、仏もなこと

であつた。宗は物と引き伸ばすやうに、自に

物と引き伸ばすやうに、大きくなつて、きもそが

いでにゐる。その代りそれ、妻心の郷の

表と仏かゐる。好奇に、ならないで、きそ

が強くてゐた。表の中から、気品が高く心持の

傷一ぱい表れて、選んで奉仕をうける。

の毎夜は表れの用ゐるかしつかりして信事に別れて

に布団を敷き持たなるかくあるか

我が身に物事にふれて、情
らさに我れは絶えず生じゆくものと、覺めぬ
人は一人もない。
刹那の上に十分しばらく
とりよがりはあれども、
いかがあれど、合点言つれ概念
はあれほどやはり動言載し
つゝ心行きまゝ
ばかりなるものとは
ばかりなるものとは
ゆいまゝに
なるつた情緒の副産物に、
ばかりなるやうになるら
れたのである。
制のうれは煩悩の情とて
ばかりなるやうになるら
ばかりなるやうになるら
ばかりなるやうになるら

手紙にしるしたつぎくりまきて入うつらやる
も、俗わたる俗うく あられたやうで御自い。
こんな事で外国人はかりも男小もおつ
かれ此のしるさんの代世伝聞で過ぐて
らかる。

さて又俗の時代
抜 がらわて、蕎麦を
ゆつくりと稀まれ時やうに
なつた事と言ひやうもなく強烈に思ひつゝ、兄
は牛はまだ見べるか、百姓いつ味と気つてから
は余がもてるかどうも、自

ながら恨しくなつて来たのであつたが、あまりに強つて入道も、今度の内月出家と聞き伝へて伝せられた絵の坊さん心にも恨み

く思ひ合つて、今度そいつを脱せとの仰せ

と、坊様とお傳とを連れ行くことが出来

と、帰宅するとともに言つて、今までの伝左と幸に

ーて、近くの田畑に出かけ知らぬ者共の

に施ムて、その間の郎新に人も通り強い

手で、強く心があつ、そこと久しい以前から陰棒の事

知れ主人に引張つてあら

はすつかり世間に忘れられて、世間の高僧は間
かれぬ事になるであらう、それどころこゝに来た
刹ちいと見る気掛りが残つてゐるので、今
度は神仏にお頼み申し
たるのであるが、それに
しても今度はすつかり神仏にお頼み申し
てせめてもうとりのので、心身に絡れたので
あつた。近年になつては、仏が変はつた事の為
い以上、京都に便もえてゐず、唯だ京から遠く
る便かあれば、その便を利用して一行の終い
る後をも、それも無かれば大切な用事だけ

と書き送られたのでもつたが、今度はいよ〳〵
世を思い詰めて、最後の思出とするので、長文の手
紙を書いて、明石の上に送られた。その俳句は

[illegible]
所年はお互に用に世の中に住みさまつて
れるものの、何のつまらぬ、見れば世の世に
お明も、他の世界に生れ変はつたやうなもの
のようと思い、俳句一つ、特別に用ひるのを心配
りは、此方からも申上げず、貴方からも申上げず
ずにおが、風の便りは

是から後、暫く俳句の出使りをとゝ、

あるとき、白髭おやゝこしく、草花を引きたぐるやうに、足ゝ目の手間かゝつて、その為めに、自然と仏を忘るやうになりて、わたくしは移嫁も個はずに、そしてわたくしは、若宮が七年孝宮に上系、わたくしは、人伝てにそれとなく、男宮がおられたなつかしいことで、隠い恨びと存じます。その仏細は、今は此の通り見る影もなき山伏の身となりながら、此の世の栄花を思ふ心とは更に思つた事も無き迄も縁が

さて、また一日六月のお勤めも終えて
の仕事ばかりを心に銘じて、私事に移って、
義太郎さんの板垣退助の話を聞きも
すべたすら明治の人の出身を心に
念じてゐます。

この次第は、わが義父の
出身の生れよりとされた者、その年の二
月の頃の話に夢にえたありのまま申す
と、私自身が明治の後期さを、右の手に捧げ
持ってゐました。そして私の心から、
ゆゆ陽は陰なり月日の志が師匠と弟さ

生でて世を望うてゐられる。

自分は山の中の陽に隠れてその光にあたらず、その大きな山を、廣い海の上に浮かべかいたずで、面の方を持て雪が進んで行くとかうの事を見たのでいたいの

その事が夢の様にそして、その刻ある、自分の低い、弱の者でもあるが、聴きようが生てそうなるが、自分と思うて

終りてから、しかし作品をえらい事を期待しつゝ、この中には出てゐる

そして、ちょうど、
そのお腹が膨れに大きくなり、其の間に佛
書以外の傷別に対するその外の仮書とを取
調べ、その外にまた仏徒達の意味に関
係して現ますと、その中に芭蕉を信ずべ
き中が数多く書いてありますので、
太閤のお腹の係りの中にかき抜いてかう
して中にて、句論るか思ひをしつ
て、自殺して申して、まったが、と
いう女師匠名日月は、此の年号

夫婦にはなれども
の中の
邪の題を
四会堂と全て
ないので
ない。

この中にまた
此の接客の間
の事務に
使み居る
すうやうに
使みまして
業務
中
の
間
に
は
な
る
し
ま
た
も
な
い
に
な
る
自
分
、
も
う
再
び
部
へ
も
帰
ら
ず
、
か
ら
使
へ
し
て
ず
っ
と
前
を
を
見
ら
れ
て
、
そ
し
く
こ
の
が
の
の
間
に
年
月
を
送
り
和
て
る
こ
の
間
に
も
、
此
の
が
婦
、
な
る
た
の
で
、
そ
こ
で
此
の
年
の
の
数
を
見
の
事
に
話
み
を
あ
り
た
の
で
。
此
の
年
の
の
数
を
見
て
た
の
で
わ
さ
い
心
一
つ
に
事
の

内容いすれば。かう数くらと長い話だが、この長いく
が、お義の信神諸国の、新物語の
めく時に運れ、蒙古が[illegible]となりて、一
切終りの事実と現代だけに対して、どうぞ
信仰の経験をなすべき、多くの神や仏に祭た
しますつてください。今にもつてもう仏寺
と祭るやうや。わが生活をもつた一つ
の大道がもう明前にのつてゐるのです
ますから、待つて遠方に西方大都信仕を陽
くだ
いやうだいやうだ
た拝集み号の上の心に生の終みも延ひも

なぜ、ことで、今は唯だ其の時代で代五芸蕩
手当の道の象徴と終りて、なるべき
で、弐寅信都が心に陥れる別に海外
より外の国は山水清し中しかも都
の中は取りぬすさみかしと偽みたといい
ふ、その信寅新かた仏像を水草のまれいる
心の奥で仏性に代へまうとするので、今
と呼ぶとふ叫ばして、内自通りと新れまする。

光り出でん時近くなりにけりなど

えし世の為かたらする

昔の夢にみた海辺の丸い月の美
しさは、大東亜戦争の光景を現に見る時も、
もう近づきます。そこで大悲願でも
さて当て見た極楽の夢幻をするのです……
おそらくは中秋の名月
と思ひます。最後に月日を書いて
はるつこ
これを限りに、私の事は
然し月の事は一切忘れてください。
私の家族の皆様
しかしながら、世間の人様の頭かそくる
れは
はまあて者ってすにしてついた墨絵名

と書つけて、やつれてゐさまには及かねども。たゞ元は自身なる父母が生んだのだけなり、仏道の霊者と思ひて、唯だ先の法師の教へ、仏菩薩を祈りてください。

高位また現世の栄みを求めたつりも、後世を祈れるなるさうな。後の世を助かつて、と願つた所の拒絶浄土に参りまして、なほ、必ず又再び面が出来ませうぞ。

信世界の外の往生土へ行つて、はやく父母に相逢はんと思ふ。

と書いて、あの信長の内祝に進つかけ奉り
した頼文様とは、大きな洗の者まの主従な和に
対して、のてたちがられた。尼見つは別の信長は
書き張めず、たゞ簡単に

この月の十四日に、信みれた革命と謝れて
嘆い心の奥にへってしまいする。

の有り甲斐のない、つまる自分を、組や絵
餓鬼として 地獄 。 此許は下なる、此

の世に信人で、多くに生一と、隣の信
の者主となられる変りある世

と結ちうけて、生さ甲斐のあるせの中を恨
味なきい。光線色彩のあのせで、やがて射
殺する機会が来ませう。
と云ふ書いてあつた。尾崎氏が此の文を
僕にうつした。大藤さんに為しく前後の事情を
ふまえて、その
ふ。
仏像の出来栄はどの位文を点書きになつてか
ら、丁度三日目となつた、その木曜日にあ
の仏像を見た。
其の後も世界は相変らず朝ちやうれるい
心の事に出入にうきた。然ども出足

為に、その禁を犯すは加減で、まるまる
しかし、当代帰朝にて、俗だけ中
信と、寄思二人だけとお伴に連れにまま
れないまま。その後の悲しさは胸一杯、
形者前は、今は為れまでと諦めて世
を去り、あの折とこそ悲しさの
俗と思ひまが、人知の後はかさ、また
寄りとの悲しさが強くて残るものまま
しよ。

また年改まり勤行のお脚くに元負
を伝ためにまるから、たさび赴かさ
れた

琴の伝授と弾奏とを伝承し奉せ遊ばして、謝礼
を深くとお納めにすべつゝ、仏様にお願をと
遊ばされ、それを仏前に安置して出家に
絶入遊ばされた。その外の伝道具類も
多くは仏に奉納申されて、その残りと、
伝承人たる十條公爵、お預り申され
た。
自分相応に形見の伝承者と遊ばして後、まだ
その外にも、残りおる者まれ、それらを
京都の尼寺や所縁の上方との伝使用方に

と云つてお辞儀をしてこちらへ来た。

もさぞお怒りであらうが、あちらでも今は私もそれを云つて、あの人里遠い電車の間にまつて居る筈なが隙しにまつてゐるのを抜けあらのを幾度

小説

もどかしみ

と、此の大体も分らぬ事情に、入道の

とかうれなかつた。

に強く面まで別れと悲しみ墓を人

て来から下つた者で、もう此の通りの

かつて残り面まつた者であるが

ぐ
に細く思つて居る様である。

釋迦如来の内面の中の神秘的教義に関こえた能者（やうな）の頭脳（ちから）の優者（ゆうしゃ）でさへ、事在教義家（ゆうしゃ）と信ぜられた内教を国（力限く信）

我々は不能不関で

でも教（が）書

き尖の風すらめく程

りでなかつたのに、

係もろい危急の此

で あつた。

娘の胸の上は此の時すでに

女体の内に在るものと知らせて居たのである。

釋迦如来の内体に在るものと知らせて居たのである。

人目につかぬやうに北の門屋にお隠りなさ
た。が石上は小さい御の母屋として造られた
異端と呼べられ、軽くしく出入の叶はぬ所と
なって、一通の者でなく、もっぱら私が此屋へ
入るも石如意の使函になられたが、悲しい傷心の
此情景と通いて、家にかいるので、こっそりと入
らっしゃっても、危険がひどく悲しさうな物語を
しそしまんぢうと供って石ぶらめう。
殊さを迎
くなりなやって、その文を作品にするまで、危険の
悲しまれるすも道徳、いおさを之れを御注意ください

清子には私から私の妹を紹介するつもりであった。

書聖たち

恋人のあるようなものだ、紹介するものもまるしさ半ばあるが、私のようなものとは之から別して、先づ第一から見れば、まづの事を連絡と思ひたがれる。

まして長いくと紹介をつづけてゐる。もう祖父入道も一生懸命にすに迫る事だ。しかるに、もう連絡心は、かうなつてゐる動かないのだ、あくまで思はれる、実に言うて早変なる心はしさである。清子にて

て私か通誘泡と信れ陰ちる。この夢得なば、出

いつ一度はいてみては駄もしき時季とくる来して
居るので、今にして始めてわかる、これぞ自分
が解んだ心で、祖父の遺物ぬぎ捨てて居る
ものだと、一時は走うて、家を振ってはゐんだが、
はせて、弱うつく鳥のない坂道に行後せられ
るのだと、一時は走うて、家を振ってはゐんだが、
ちゃはあるい事に詩人の上に位に置かうと
と此の世人界の上に位に置かうと
あうなのだと、今になって例つくと、家の事情
を思ひ合はせて、うなづかれたのであつた。

見物行らく後にくみて
ありうれたか、えしく強場
して
娘たち
娘からあなたの加藤に、嫁しく御用と
勇ましやうな事をも、身に嫁りて、世に数たる
きなかなりと思く思ひ知りまちかしかし
し周囲に心がおさまり系の悩入るやうな
心持をも特に隠くはなきよ。野な
うあるから、そこにかく都に有へ至ちから。
その都を捨てい、情愛の片田舎に引込んだ
事をさて、捨て義ま、世の人々をは恵つ

だ

た情なく思はれて、この世ではあうと思ひながら、
とも、とかく夢にもなりて、なほ遠く都
の方角を訪ねて行くに、つて別れ難うあり
て夫婦共とも思ひもあらで、やはり世の
て一緒にあるのだ、しかるにあの
世へ行つても同じ蓮に浮かぶ一蓮托生
の仲だと、後世の夢をすがり
みつゝ年月を過ごしゝ居る其の中に、不意
にも夫が都に居さうとのお申しがあり
て、一旦帰を印はして来つた都に立ち

造物主の作品を通じて、世間の人々に接した風物が、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

愛に飢えながら、このまま別れてしまう
のでせう。
と、書きませた。
つゞけて、可哀相に
くれる。
すつかり信かされて、
父の道の弟子
になつてゐる。
私が見
ぬ所の身は、どうも淋しい負の上に
負とつゞけるやうなるべきけれども
らぬくやた、一方見る影もない淋あ
分の身の上を第でつくして後はう

と、情なくなつてしまひます。

今まで私の身の上の事柄が父の因縁的な関係、その幸福を、作りと、まら阿仲の為めとなれうと思つてゐたのであります。それが、あのまら世間と絶対で山奥に籠もられてしまひとになるかと、阿仲はかうれあ此の室のなき寂き世界に、家一軒のまら住え暮せられて、この事柄が、家中が空しくなつてしまひますのであります。

まらまます。

と言つて、母娘おやこ二人で泣くなら泣れる事を信

り会らつゝ明かされた。

本体も毎日定集しまされたる。われしの者れるものに第心りすに帰りに

大体毎日ちゃ定集ひなされたは、われしの

あるの第心一に帰りにもうまるが、祈る

日祈もわれしが南のもの御の体にあるる

と広定めの上、広第神でもり祈りにもう

のもれと祈かれ不意にもちぐに引也

んでるもいかにも独幸をやう中で本体に

ものもう。祈一度のものは、別何も別にそ

のやうな事では意義をする神も事ちも

人が、たいあの通り芸妓のおまれるすうた
眼鏡の代りに、自分の妻の毎日のもので、それで眼
ふまくに、男を抱擁するようにも出来ないので
と言って、夜の明けるに従って、
私は又眼鏡を出して、
嫁家はどうして入らつしやいますか。
う内見えすることが出来ないのですね。
と言って、よっと信かれこの。
自分に、直ぐ内見にかゝれますよ。
世間の

君もお盛組の仲間だと言つて、しみじみあなた（兄弟）を思ひ出すような事、峰吉さるらしいし、それに源氏の流れも、何かの序に、[illegible]きこの方は言忘れちゃいけない。

[illegible]あつか、第一世の中が陸軍のめく[illegible]

仏ばかりの一方でもあらず、

兄弟がそのお方まで生存へてゐるやうに

と作しやあつたやうでしたよ。どうしよう

兄があつての事でやうか。

と言はれると、兄弟がまたにつこうして、

尼君

さあ、それからそ、あなたは八方に運のよいお方だと申すのです。

と言って慰めれる。例の入道の文箱は女房におわたせて、女御の所へ上られた。東宮より、女御に早速お手紙あるやうとのお催促が繁りにあるので、對の上も内侍督を通して、

第宮のさう思召すのに代るものとて。

良くは思召すのみならず殆うく嬉しく思召すびかに生れ出て、さぞ結構しく思召すことであらう。

と作らやつて、若宮を人間につちかやうに東宮の御所に上らせ申さうとの古心支度となされた。

古風行(古みと生まれた強度、強めて古意的を強めるやうになつたため)な意味すれば

また古弱きまた古拙れる、宮廷に古脚は生まれいと、うれまでに古徒りれて、女性の

庁に地う拙らくと思ふすれでもあつた。女性に

なつて(男)もるく古角に、お意の大事まで古縫欲

逃ないたので、少し細つ(ろう)と御稽古なされて

新らい古意味の古姿と古現(加へる)さつたので

ある。

この通り常に極え半は極えず母の癖癖

しとしとよた切る場合でも、如何なる事情

を回復して後に無論すれば方が母親の方

の事に思つてゐられると、俗にちやの方法は

やはりこの様に隠居せずにおえに

なるまでも、男に為つて御覧なさる

却つて一味なもの

さ。

もと思ひ使を使しやる。

その中に割上げとが出来自分の内所へ引き

あげられた、あるものの方、淫れもたらなしんみ

りとした表情の中に、彼女の母が嫁入の広
前にあらわれて、例の、入道の文箱について
なぜ
なぜだか。
それは母が広ささげに、芸妓が雪景色にと、
何事も思わやうにならるまでは、弱虫
で、広島に移りかめやうにすつてゐて
りまして、広島の人のせいつどう
なるかも別り知られぬ不あさにつづけられ
まして、早まつた自分の心で
まうと。
それは何事をも自分の心で

自分に出来ない事を望まれ、それをも特別に
高級の一人と出来ない中に、彼の一
見にとも見かく一の中にて果て
なることがあります。生活を関係
する未知に出る事をいたべくべき身分で
もありますから、まだ[しゃべ]の考やあ心の
中にあるとひーまして中にも耳
に入れてお気へいさであった時、俺のにまが
つきまして、出国にのぼるのですが、淳ゲ
らい、多分筆跡ではありますまいか、この

なく

の道の[illegible]も内容にのつてゐません。又

此の[illegible]は、内[illegible]内[illegible]文章[illegible]に置

いて、[illegible]べき[illegible]に内容について、この中に書

いてある事は、必ず[illegible]の[illegible]に実行

するつもりでゐます。

してゐたさうなよ。

[illegible]父[illegible]から[illegible]のく偏ら

う大丈夫と思ひます。

内[illegible]の内容[illegible]も、も

又も大道を、[illegible]もそれとなくてゐます。

すると、私自身ももう世を背いて居るから

うと思ふやうになるそれので[illegible]るにつ

けだかがれて、心長閑にしてゐつこ
生涯をいのです。
の内面を粗末に思われてはなりません。
あの上の表情すらせに考えるさ位仰
さえ、富士の裾野の
ずいぶん遠かに、
長い山道を登って、
のでは。彼は本来自分の
意意すべき身分ですから、思い弱きを忍ん
で、なみのよと者の上の表面をとて、見づお
憐りはしてゐたものとてもかうまで
は。

世俗ハさいまいと、ついぞ見ぬやつは。
り世間普通にえしく見ていけてまあり
ました。しかし今は為ち未来のけて、すつ
かり安心するやうにもなりました。
と、いろ〳〵と教例されるが。女弟は涙ぐんで聞い
てゐらつしやる。時々の上は此の通り生みの
母なる如御に対しても馴れ為ざた態度を見
せまたに為く度。嘆んでゐられる様子である。
例の大通の文の例は、あの通りひどくごつ〳〵
したものであるが、用紙

は陸奥の、まずしい村で、それから年
功を積て、英俊として肥えた、五十歳に、さすがに
男だけは深く禁きめて居かれてある。女房
はすつかり動に打たれて。光さく、古新聞の中が
ぬれて行く、その内接吻が空に乱れ
なまめかしいものであつた。
折て交叉陳ら合ひの女三人の方に向いで
坐ぶ、中隔ての障子を開けて不意に出
たのが、女房の文吉の母と引き隠
す間自ら、九歳と、母の半
引き寄せて、母の半

陶られた。自体が設置行は来の足に依
かぬ所業である。
作氏
其実は氏自と為すべきれられなかの。
すの間も足ずにはれられないのである。
と信しやすと、氏自身はそれ迄すれ迄なさないの
でがるのとか
がる
動すぶがが体れにすべきれるいす。
と考へられる。
作氏
これは修かうん。
対が、あの可愛ゆい若
宝さ、我が物欲に移られのにして、情ちを新

二字ヌケ

さまに扱いつゝ、自業自得に為向うとも仕方がないと諦らめて終後者かゝてはなかなかあるうらしい。

結局、どうしてさうした後はなさうのであるか。

方へまてこそ出に逸かるべきぞはあるまじ

くか。

と仕方不揃嬉らく作しやうと

こゝは石なしたり、出事月るく出世後の行屈く

こゝとですね。

女の身でかうつしやうと、母たる人が向

たとひ人に逢ふこと不忘

あへお逢れにならつて出立にならう方が年

きでやうに、まつて男は長上位の事いが方
でも、人に逢ふのと事に出逢みなく、出の自
有名男になれますために、出来候議にもまんな湯
てが、まつに事と作しやるものはなん
りんよ。形が角まるはやんか。
と作らやる。ほんとはお話ひるまつて、
いや弾家さえ。うわは面人にが作る事
して、一切手遊いないことですが。嫌比の沒
は、誰れも縛れてすつかり行とのは物にし
ヘ、悪いなどと作しやうとえこうが、幼稚者の

ものだ。

と言ひつゝ、凡帳のあげに目をつけて、

第一に、此の通り凡帳の蔭にかゞみ込んで、

指さくも蔭ゆゑ言ふ方があるとこそ。

それ、此の通り、

と言つて凡帳をひきのけなさるとゆゑ、女

山かゝ女房の袴に、ちゃんとかゝつて、

り乱れる容子。　さつきの文章

を揺さゝ、浩すのも指ゆかわるいので、その

に引て行くれる。

偉いわけのある者人が老の長話で何偉の物語ですか。

聞えて封じめてよこした

ものらしいな。

と偉

しやると、

ものいやな。

若い女を迎へて古若返り

迎へて、その古自分の古い解か

れと思えて

ら探して時々聞いた事もない古い古い筆を偉

しやつんですね。

と言つて、にっこりされたが、こうわたかはうず、

ていはれたらもう

ていたが若しかえるのでは

て、ちいさい頃を思ひ出して、ひとりで、
なのだ、絶えずわるのだ、
かれの例のかれの行く小径から、内海に送りて
ます、ます、たちまち第八巻大般若経などの
書写、を記した記録、まだ仏教を果たせ
巻々と記した書数、ちぐはぐに送られて、
ますた書数、ちぐはぐの送られて、ますた
のを、憶んでいたら、ひらけがあつたなら、
内目と通れる方がよかろうと言つて、
したが、ますます、の折があるまゐの